



鈴

佐佐木 邦子

ドライブ途中、ふと目についた小さな郷土資料館に入ってみた。古い農具や簞などに混じって、土鈴が飾ってあった。

粘土をそのまま固めたような、変哲もない土の鈴だ。いかにも素人細工といった感じで、表面はゴツゴツだし色も地味すぎる。おばあちゃんお手製のカシワ餅に似て、餅の合わせ目からアンコが覗いているように、黒い隙間が覗いていた。目を近づけると、玉が入っているのがぼうっとわかった。

ちょっと不細工で素朴な分だけ、不思議なやさしさと懐かしさがある。音を聞いてみたかったが「手を触れないでください」と書いてあった。仕方がないので、ケースの外からただ見ていた。

昔、ある長者に娘があった。あるとき娘が病気にかかり、医者だ薬だと手を尽くしたけれど、幼いまままで死んでしまった。娘の柩には、日ごろ愛用の鈴が入れられた。村の男たちが柩を担ぎ上げると、柩の中からかすかに音がする。十分に生きられなかった娘の溜息のようで、男たちははっと緊張した。再び柩が担ぎ直され、男たちは歩き出した。カランコロン、カランコロンと、村の寂しい小径を寂しい音が遠ざかってゆく。そんな話を思い出した。

鈴は、空洞のある丸い入れ物に丸い玉を入れ、玉がぶつかる音を楽しむという、単純すぎるほど単純な仕掛けだ。あまり単純すぎて、楽器と呼ぶのもためられる。しかし寺へつづく道を次第に遠ざかってゆく音は、鈴だからこそ美しい。鈴と聞くと不思議な懐かしさを感じるのは、わたしだけだろうか。

鈴は楽器なのか玩具なのか。鈴で遊んだ記憶はあまりない。わたしが子どものころだって、鈴はもう

玩具としては人気のあるほうではなかった。それでも干支人形や鳥型の鈴はあちこちで売られていたし、女の子のぽっくり下駄にも鈴が入っていて、歩くと可愛い音がした。神社のお社にはたいてい大きな鈴が下がっている。これを鳴らして願い事をするのだから、鈴の音は神様にも届くのだろう。馬の首に鈴を付けて、シャンシャン鳴らしながら華やかに花嫁道中をした地域もあった。

サンタクロースだって鈴の音を響かせてやってくる。だいぶ前に見たアルプスの映画では、朝靄の中を羊の鈴の音が近付いてきた。日本でもヨーロッパでも、鈴の音とともに、もうひとつの世界がちらりと覗く。

ありふれた日常を少し離れたところで、鈴が鳴る。鈴が懐かしいのは、自分でも気付かない生まれる前の遠い記憶が、意識の表にふっと漂い出るせいかもしれない。

2009. 4 こもれば第7号